

しがだい資料展示コーナー企画展

Autograph

— 中村史朗の書 —

2023.1.10 [Tue.] - 6.30 [Fri.]

第Ⅰ期 2023.1.10 [Tue.] - 2.27 [Mon.]

古典に学ぶ
— 日々の学書 —

第Ⅱ期 3.1 [Wed.] - 4.27 [Thu.]

近代の日中書法交流
— 研究と書作の間 —

第Ⅲ期 5.1 [Mon.] - 6.30 [Fri.]

シン・臨書
— 古法の再編成 —



なかむら しろう

監修 中村 史朗（滋賀大学教育学部教授）1960年生まれ

筑波大学芸術専門学群美術専攻・書コース卒、筑波大学大学院修士課程芸術研究科美術（書）専攻修了博士（文化交渉学）

日展 特選2回受賞

専門は、書学書道史（近代日中書法交流を中心とする）、漢字作品制作、漢字仮名交じりの書作品制作

Autograph

— 中村 史朗 の 書 —

第Ⅱ期 3.1 [Wed.] - 4.27 [Thu.]

近代の日中書法交流

— 研究と書作の間 —

私は、研究面では折々に関心のあるテーマに取り組んできましたが、大きな柱になるものとして、王羲之書法の研究と近代の日中書法交流の研究を挙げることができます。いずれも書作に取り組む自身の現在地を知る上でも重要なものです。

今回はそのうちの近代の日中書法交流の研究に関する展示を実施します。それは、この彦根が日下部鳴鶴という近代日本書道の発展を中心に支えた人物のゆかりの地であることとも関係します。明治13年に清国公使館随員として来日した楊守敬という中国人学者は、それまで日本に伝わっていなかった清朝の書道理論や金石の拓本を中心とする新資料をもたらしました。日下部鳴鶴、巖谷一六らは楊守敬と親しく交流し新知識の吸収に努めました。それには「筆談」という特有の方法に拠って行われました。そして鳴鶴は「六朝書道^{りくちょうしょどう}」という新書風を構築し、明治の書の領袖となりました。ただ、明治・大正という時代の書は、必ずしも鳴鶴の独壇場であったわけではなく、他にもさまざまな書派が生じ複雑な様相を呈します。今回は、鳴鶴とあらゆる立場の書人の関係性に注目して展示を行いたいと思います。近代日本書道の発信地としての彦根を認識する機会にしていいただければ幸いです。



2023年3月1日 中村 史朗

Autograph

ギャラリートーク

第Ⅰ期...2月15日(水)、第Ⅱ期...3月10日(金)、第Ⅲ期...5月16日(火)

いずれも13:00~14:00

人物紹介 日下部 鳴鶴（くさかべ めいかく）

江戸・天保九年～大正・十一年（1838～1922）

日下部鳴鶴は、明治・大正期を代表する書人として周知の存在です。

彦根藩士の子として江戸の藩邸で生を享けました。幼名を八十八、内記などといい、長じて東作を名のり、字を子暘と称しました。鳴鶴の号は三十代後半から用いたようです。

二十二歳で日下部家の養子になり、三十一歳で明治政府に徴士として仕えます。内務卿の大久保利通の信任を得て要職を歴任、太政官大書記にまで栄達しますが、大久保の突然の死に遭遇し、官を辞して一書家としての道を歩むことを決意します。

書の専門家としての鳴鶴の原点となる出来事は、明治十三年に清国公使館随員として来日した楊守敬との出会いでした。中国・清朝において発展した金石学の成果や法帖研究の方法、あるいは柔毫長鋒筆を駆使した用筆論など、従前の日本人が未知の領域を意欲的に吸収しました。また楊守敬が携行した多量の碑版法帖にも目を開かれ、北朝の石刻資料を中心に技法研究を進め、楷書を中心に独自の書風を築きます。後に、わが国“六朝書法の祖”とまで称されるようになり、大正期にかけてその書風は広く一般に浸透します。その揮毫による石碑も全国に一千有余建立されたと伝えられています。晩年にかけて、中国の文人と交流しさらに新情報をもたらすとともに、多くの門人を養成して巨大な門流を形成します。「談書会誌」「書勢」などの雑誌も刊行し、多くの資料を紹介するとともに自身の学書論を世に問いました。



出典：『鳴鶴先生叢話』（昭文堂）

人物紹介 楊守敬（よう しゅけい）

清・道光十九年～民国四年（1839～1915）

楊守敬は、中国・清朝末期の学者で来日して日下部鳴鶴らと
したしく交流しました。この人がもたらした新知識によって
明治以降の日本の書は一気に活性化します。

楊守敬、名は惺悟、主に鄰蘇老人の号を用いました。湖北省・
宜都の人です。幼少期から苦学して官途をめざしますが七度
にわたって会試（科擧の最終試験）に合格することができず、
やがて研究著作に専念するようになります。その学問は、地
理学、目録学、金石学、書学など広範におよびました。

明治十三年（1880）に出仕日本大臣・何如璋の招きで清国公
使館の随員として来日します。その際に、青年期から蒐集し
てきた碑帖類一万数千件を携行し、それらを目にした日本人
書家は驚愕しました。日下部鳴鶴、巖谷一六、松田雪柯らは
繰り返し公使館の楊守敬を訪い、その指導を仰ぎます。こう
したやり取りを通じて北朝の書など日本人にとって未知の資
料が普及するとともに、書に関して実証的な研究手法が一般
化するようになります。

一方で、楊守敬自身は、日本に古来伝存する漢籍類に注視し
訪書に励みます。その営みはやがて『古逸叢書』『日本訪書志』として結実します。帰国後は一時教育職に就きますが、
動乱を避けて上海に寄寓し、畢生の大著『水經注疏』の完成をめざしました。そのかたわら生活のために書や題跋の
揮毫を精力的にこなし、日本人の有力者がそれらを入手します。大正四年（1915）に楊守敬が没すると、山本竟山と
いう書家の主唱で、京都図書館において追悼の展覧および後援会が催されました。鳴鶴も賛助に名を連ねています。



肖像写真：楊守敬記念館(中国・湖北省)蔵

人物紹介 巖谷 一六（いわや いちろく）

江戸・天保五年～明治三十八年（1834～1905）

巖谷一六も近江の人で、東京で官僚として活躍するかたわら鳴鶴らと交流して書法の研究に努め、独自の立場で新書風を築き、明治期の書に足跡をとどめました。

巖谷一六、名は修、字は誠卿といい、一六、迂堂、古梅、喩霞などと号しました。家は代々水口藩に仕えた医師でした。少年期から京都に出て医術、経史を学ぶかたわら、書の中沢雪城、画を藤本鉄石に師事しました。明治元年に徴士となり明治政府の要職を歴任します。一六も書画詩文への思いは強いものがありましたが、鳴鶴のように書を専門にすることはなく官途を全うしました。明治 24 年には勅撰により貴族院議員になっています。

一六は、はじめ幕末の唐様の名家である巻菱湖の風を学び、中国・元の趙孟頫をも取り入れて自己書風を固めていきました。当時としては常道の学書であったといえるでしょう。明治 13 年に楊守敬が来日して、鳴鶴らとともにその説に接すると、大いに啓発されるところがあり、その書風は一変します。鳴鶴が研究肌で地道な臨学を通じて「六朝書道」

の体系を築いたのに対して、一六は感覚的に秀でたものがあり、北朝の碑拓を観察しながら持ち前のひらめきによって斬新な新書風を打ち出しました。

一六も、多くの碑文を揮毫し、学書用の手本を数多く出版したので、その書風は全国に浸透しました。また一六は、晩年には各地を漫遊し、住民の歓待を受けると気さくに揮毫のもとめに応じたといえます。滋賀県でも郷里の水口町はじめ旧家には多くの一六作品が蔵されています。児童文学者の巖谷小波は一六の子です。



出典：『書道全集』（平凡社）

人物紹介 内藤 湖南（ないとう こなん）

江戸・慶応二年～昭和九年（1866～1934）

内藤湖南は、一般に東洋史学の大家として知られていますが、近代の日本の書にも大きな影響力を持ちました。

内藤湖南、名は虎次郎で、字は炳卿といいました。秋田県鹿角郡（現鹿角市）の出身で、湖南の号は出身地が十和田湖の南にあることにちなんでいます。儒者の家系であったため、幼少から父の指導で漢籍に親しみます。秋田県師範学校高等科を卒業して小学校の訓導を務めますが、二年で退職して上京しジャーナリストとして活躍します。「明教雑誌」「大同新報」をへて「日本人」などの編集に関係しました。その後大阪朝日新聞にうつり中国関係の諸問題に健筆をふるいます。続いて「台湾日報」「万朝報」の主筆として活躍するなどして、中国問題の権威としての地位を築きます。明治四十年（1907）には、京都帝国大学文科大学の東洋史講座にむかえられ、講師をへて教授に就任し、以後二十年にわたる大学での学生生活に専念します。

湖南の書に対する見識と技量は、また時代を代表するものでした。その深い学識を背景としながら、王羲之から智永をへ

て、初唐の名家へと受け継がれる帖学の正統を重視し、自身でもその系統を踏まえて学書を実践しました。晋唐風の小字には余人の追随を許さない書品の高さがあります。その学問の全容は『内藤湖南全集』全十四巻に拠って知ることができ、書に関する論説、講演記録、題跋類などが少なからず含まれます。

内藤湖南は、東京世田谷の豪徳寺にある「日下部鳴鶴碑」の撰者でもあります。鳴鶴には先達として敬意を払いましたが、その「六朝書道」には否定的な姿勢をくずしませんでした。



出典：『内藤湖南全集』（筑摩書房）



小野湖山 四条啜懷古七律詩 個人蔵

小野湖山（江戸・文化十一年～明治四十三年、1814～1910）は、幕末から明治にかけて活躍した漢詩人で、現在の長浜市高畑町の人です。少年期に江戸に出て梁川星巖の門人となると、詩人として頭角をあらわし、大沼枕山、森春涛らとともに時の詩壇を代表する存在となりました。書も江戸の唐様の書風を修め骨気のある行草書をよくしました。日下部鳴鶴は、同郷の先達のために「小野湖山先生碑」を隷書で書いています。



河東碧梧桐 「官服の」 個人蔵

河東碧梧桐(1873～1937)は、自由律の俳人で俳句の革新運動を主導した人物として知られています。一方で、中村不折らと「龍眠会」という書の結社を興し、意図的に奇抜な表現を試みる、新しい“六朝書道”を展開します。書の方角性をめぐって鳴鶴らとは厳しく対立しました。



内藤湖南 董思白語 個人蔵

内藤湖南は、清朝の書の動向をよく理解していましたが、流行の“六朝書道”には終始批判的で、王羲之を軸とする晋唐の書を尊重し続けました。この作は、王羲之書法の再興を主張した明の董其昌の語を書いたものです。来日した楊守敬が鳴鶴らに伝えたのは、実はこの董其昌の系列の用筆論だったのです。

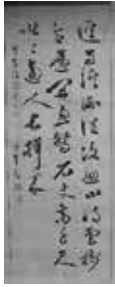


巖谷一六 五言絶句 個人蔵

巖谷一六は、また鳴鶴とは異なる視点で金石資料にアプローチしました。肩を外したような転折が特色の“一六体”を作り上げましたが、この作は行草書にその技法を応用したような書きぶりを見せています。所望に応じて即席で書いたものと見られます。

Autograph

— 中村史朗の書 —



日下部鳴鶴 耶馬溪詩 其一 滋賀大学附属図書館・教育学部分館蔵

晩年の日下部鳴鶴は、現在の大分県中津市の耶馬溪という名所の峻厳な景観を好み多くの詩を作っています。この作もその一つです。鳴鶴の草書は唐の孫過庭による「書譜」という作品を基盤にしています。この作は「書譜」の字形を参照しながら、工夫して“六朝書”の厳しい用筆を取り入れています。



楊守敬 臨裴將軍碑 民国二年(1913) 個人蔵

楊守敬は日本滞在中に多くの日本の文化人と親交を結びました。彼らは楊守敬の暮らしを支えるために、その書の頒布を続けました。この作品もその一つと見られます。唐の顔真卿作と伝えられる破体書の名作を臨書しています。楊守敬最晩年の力作です。

<参考文献>



日下部鳴鶴 大久保公神道碑 勅書原本写真精印本 昭和二年(1927) 西東書房

大久保公神道碑は、鳴鶴畢生の大作で“六朝書道”の到達点を示すものです。碑身は東京の青山霊園に現存します。この書籍は、碑の稿本を大正期に影印出版したものの再刊本です。鳴鶴は山中温泉にて重野安繹による約三〇〇〇字の碑文を一気に書き上げたといわれています。



巖谷一六 「三体千字文」「勅語帖」

巖谷一六は、官職を離れることはありませんでしたが、楊守敬らとの交流をへて意欲的な揮毫生活を送ります。“一六体”による出版物も、鳴鶴同様に多数刊行されています。鳴鶴、一六ともにそれら出版物はテキスト性が高いものが多く、その書風の浸透を意図していたことがうかがわれます。出版文化と“六朝書道”の発展は軌を一にしているといえるでしょう。



「日下部鳴鶴先生碑」除幕式の写真 「書藝」第四卷第

八号 昭和九年(1934) 平凡社

鳴鶴の没後に東京・渋谷の豪徳寺（井伊家の菩提寺で鳴鶴の墓所）に、この碑が建立されました。撰文は内藤湖南で文字は鳴鶴の筆跡から集字されました。この写真はその除幕式の様子を伝える貴重なものです。内藤湖南、長尾雨山、比田井天来ら書壇の名士が勢揃いし、鳴鶴の影響力の強さを示すことができます。



「楊守敬、巖谷一六筆談」影印 「書藝」 第四卷第十一号 昭和

九年(1934) 平凡社

楊守敬と日本人書家との筆談記録は、ほとんど実物が伝わっておらず、鳴鶴の清書したもの等でその内容を確認しなければなりません。この影印資料は、一六と楊守敬のやりとりを直接に知ることができる貴重なものです。これを見ると、いわゆる「六朝書」の用筆法は、はじめ鳴鶴ではなく一六が確認したことがわかります。



「談書会集帖」 大正十四年、十五年(1925、26) 談書会 晩翠軒印行

談書会は、明治四十年(1907)に組織された組織です。当時の有力な書家を会員として網羅していました。鳴鶴は発起人の中でも筆頭格の存在でした。「談書会集帖」は、会員や関係者が所蔵する資料を影印して頒布したものです。明治、大正の書の動向を知る上で重要な資料とされています。鳴鶴はこの談書会で体調をくずして亡くなりましたが、その後もしばらく会は続き「集帖」も刊行されました。

しがだい資料展示コーナー企画展 「Autograph－中村史朗の書－」 2023 年 1 月 10 日（火）～ 6 月 30 日（金）

編集・発行：滋賀大学経済経営研究所 〒522-8522 彦根市馬場 1-1-1 TEL 0749-27-1047 E-mail ebr@biwako.shiga-u.ac.jp

主催：滋賀大学 発行日：2023 年 3 月 1 日